慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	老舎の文学と文学観 : 初期三部作と「離婚」について
Sub Title	Laoshe's literature and his view on literature : His three early novels and "Divorce"
Author	高橋, 由利子(Takahashi, Yuriko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.217- 235
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

老舎の文学と文学観

――初期三部作と「離婚」について――

高橋由利子

一、まえがき

筆者はかつて老舎の初期の三作品（「老張的哲学」・「趙子曰」・「二馬」）について、その当時の老舎の状況と作品の分析を通して、キリスト教との関連を追求した[1]。ここではさらに、その後の作品である「離婚」と前三作品との比較を行ない、それらの作品の中に見える老舎の描写方法がどのように変化しているかを論じ、最後にその変化の背景となる原因について、考察を加えるものとする。

老舎はその初期の三つの長編小説である「老張的哲学」（一九二六）・「趙子曰」（一九二七）・「二馬」（一九二九）を書いてから後、「離婚」（一九三三）を書くまでの間に、いくつかの長編小説を書いている。従って、「離婚」は初期三作品のすぐ後に書かれた作品ではない。それにもかかわらず、それを初期作品との比較の対照とするのは、それが登場人物の描写や物語の展開において、非常によく似た構成を持っており、その共通点と相違点を比較することによって、老舎

の小説執筆上の態度の変化を指摘することができると考えたからである。

このことは逆にまた、なぜ初期三作品のすぐ後に書かれた作品を比較の対照としないかということの理由にもなる。すなわち、それらの作品は初期三作品とは性質が異なるので、比較することが大変困難であるためである。それらの作品とは、「小坡的生日」（一九三一）・「大明湖」（一九三二？）・「猫城記」（一九三二）であるが、このうち「大明湖」は上海の商務印書館で印刷中、「一・二八」（上海事変）に遭い、原稿もろとも焼失したため、現在見ることができない。また「小坡的生日」はシンガポールの華僑の子供を主人公とし、南洋の実情と作者の幻想をとりまぜた童話風小説であり、「猫城記」は猫の国を描いた一種のフィクションであって、一九三〇年代初期の中国人社会の実情を描いた前三作とはその性質を異にする。そのため、これら三作についての検討は別の機会に行うことし、今回は分析の対象としない。

二、「離婚」について

「離婚」は老舎がイギリスから帰国後、斉魯大学(2)に赴任し、そこで教鞭を取るかたわら書かれた長編小説で、一九三一年六月から七月十五日という短期間に執筆され、一九三三年八月に良友復興図書公司から単行本として出版された。(3)この小説は、老舎の初期二作品と同様に、一九一〇年代から一九二〇年代にかけての北京を舞台としたものである。

主な登場人物は、北京の役所である「財政所」に勤める公務員である。そのうちの一人を除いてすべて結婚しており、彼らの家族をふくめた職場と家庭での生活が描かれている。題名が「離婚」となっているのは、彼らの何組かの夫婦が必ずしもうまくいっておらず、離婚ということばが話題にのぼることが多いためであるが、これはあくまでもそれを軸にして彼らの考え方や生き方を書き分けるためのひとつの媒体にすぎず、この作品にとってはあまり大きな意味を持つ

ものではない。

小説の要となる人物が二人おり、それは張大哥（ヂャンダーガー）と老李（ラオリー）である。このうち張大哥は、彼をひとつの典型人物として他人と比較したり、彼の生活におこる色々な事件が物語の展開となる一種の狂言まわしのような役割であり、実際の主人公は老李で、この老李の生活および彼の考え方や生き方が、色々な事件とのかかわりを通して描かれているのである。

この二人は財政所の同僚で、友人でもあるが、張大哥が現状に満足し、世話好き、社交好きの典型的な北京人であるのに対して、老李は役所の仕事や同僚についても、農村出身の妻についても、常に幻滅と違和感を持っている。しかし張大哥はそんな老李を説得して、いなかに別居していた老李の妻子を北京に呼び寄せ一緒に生活するようにし、また家族同士で親しくつきあい始める。しかし、老李の持つ寂莫感は消えず、ひそかに隣人の馬少奶奶（マーシャオナイナイ）（夫に駆け落ちされて義母と共に住む）に気持ちを寄せるようになるが、彼女の方は老李の妻に対する気がねもあって、そんな気持ちを受けつけない。

彼らの勤める財政所のボスに小趙（シャオヂャオ）がいる。彼の地位は所長より下だが、プレイボーイで所長夫人とも関係があり、また各処にコネがあって、実質的に財政所を牛耳っているだけでなく、他の役所や機関の情報や人事にも精通し、闇の世界で幅をきかす人物でもある。張大哥の家には、丁二爺（ディンアルイエ）という親戚の男がいる。彼は若い頃結婚に失敗し、妻に息子を連れて逃げられて以来、酒びたりの生活を送っていたのを張大哥に拾われた。それからは張大哥の所で、子供の世話をしたり、留守番や使い走りをしたりして長年働いている、召使と居候の中間のような人物である。

張大哥には天真（テイエンヂエン）という、うぐうたら息子と、秀真（シユウヂエン）という高校生の娘がいるが、この二人をめぐってひとつの事件が展開してゆく。その事件とは、息子の天真が共産党との嫌疑をかけられ、某機関に逮捕され、拘禁されて居場所がわからな

くなってしまうことである。このため張大哥は八方手をつくすが、どうにも方法が無く、半病人になってしまい、ついには役所を免職になる。

老李は友人の張大哥のために、闇の世界にもコネのある小趙に、天真のことを頼みに行く。小趙は力になることを承知するが、張大哥には、もし息子の天真が釈放されたら、そのかわりに娘の秀真をくれるように言い、またそのことは老李も承知しているとウソをつく。そのことを聞いて、老李は驚いてもう一度小趙に会いに行き、自分の金二五〇元と張大哥の家作一軒を譲ることを条件に、秀真のことは言い出さないことを約束させる。

ところが一方で小趙は、ひそかに秀真を誘惑し、モダンな紳士を装ってすっかり秀真を自分に夢中にさせてしまい、秀真の方から父親の張大哥に小趙と結婚したいと言わせようとたくらむ。このことを秀真の話から見抜いた丁二爺は、自分が小さい頃からかわいがってきた秀真が、小趙の手にかかるのを防ぐには、小趙を殺すことしか無いと思いつめ、老李にこのことを打ちあける。

老李は役立たずの居候と思っていた丁二爺がそんなことを言い出したことに驚くが、自分自身は人生そのものに懐疑的になっているため、加勢することも、ひきとめることもできない。

丁二爺は秀真の使いと偽って、天真の釈放を早めるよう小趙に働きかけて、実際に天真が釈放されると、今度は秀真が会いたがっていると、ウソをついて小趙をおびき出し、彼を殺す。そしてそのことを老李に報告し、小趙が張大哥から取り上げた家作の権利書を老李に渡す。しかし、自らは人を殺したことの罪悪感におびえきっている。老李はしばらく自分の家に丁二爺をひきとることにする。

一方、老李が思いを寄せていた馬少奶奶の夫が帰って来ることになり、馬少奶奶は万一、夫が暴れた時の用心のため

に老李に居てほしいと頼む。老李はもしその夫が馬少奶奶に少しでも暴力を加えたら、彼女と丁二爺を連れて南洋へ出奔しようとひそかに決心する。

ところが意に反して、帰ってきた夫と馬少奶奶は和解してしまい、失望した老李は家族と丁二爺をつれて、夜逃げ同然に、いなかに帰ってしまう。張大哥（既に元気になり、復職している）や他の同僚たちは、老李がこの北京と公務員の職を捨てていなかへ突然出奔したことが理解できず、「どうせまた帰ってくるだろう」とうわさし合う。

以上が「離婚」の荒筋であるが、この小説は前三作と比較すると、どのような特徴があるのだろうか。以下にそれをもう少しくわしく見ていくことにする。

三、「離婚」と前三作との共通点

「離婚」は前三作と比較すると、いくつかの共通点がみられる。その一つは「離婚」の中の主な登場人物の性格が、すでに前三作（「老張的哲学」・「趙子曰」・「二馬」）の中で描かれた人物と共通したものがあるということである。

例えば、主人公の老李であるが、彼は自分自身はやぼったくて風采があがらないが、一定の教養を持ち、何らかのロマンを求めている。これは前作の「趙子曰」の主人公である趙子曰（ヂャオズーユエ）と共通している。また、自分の職場や妻に希望を見出せない老李は、一人の女性に恋心を持ち、それがかなわないことがわかると、生計を立てていた場所から出奔する。この行動パターンは、前作の「二馬」の主人公、小馬（シャオマー）と同じである。また老李は、大学生の頃には、世に出たら、エリートとして中国の社会を変えていこうという自負心を持っていた。これは趙子曰が小説の最後になってから、自分自身の大学生としての役割を自覚した時点での決心と共通している。さらに、老李が大学で財政学と銀行学を勉強したという

ところは、小馬が将来経済学の勉強をして中国にとって役立つ人間となろうとした考えと、共通している。つまり、「離婚」における老李は、前作に登場する趙子曰と小馬の二人と共通する性格をそなえているのである。

悪人である小趙を見てみよう。小趙は、張大哥に対し、息子の釈放に力を貸すかわりに娘を要求する。これは、前作の「老張的哲学」の主人公、老張（ラオジャン）が、自分に借金して返せなくなった李老人（リーラオレン）の借金を棒引きにするかわりに、李老人の姪の李静（リージン）を自分の妾にするよう要求するのと同じパターンである。また、闇の世界のコネ作りに熱心な小趙は、自分の手付きの女性を、他の男性に提供して何らかの利益を得ようとするが、これは「趙子曰」に登場する美男子の悪人、欧陽天風（オウヤンティエンフオン）と同じ行動パターンである。つまり、小趙は、前作の古いタイプの悪人、老張と、新しいタイプの悪人、欧陽天風を混ぜ合わせたような人物である。

丁二爺はどうだろうか？彼は人生に一度失敗し、社会的には低い地位にあるが、子供には非常に人気があり、他人の不幸に対してはすばらしい知恵を発揮して、その救済に大きな役割を果たす。これは、「老張的哲学」の中の救世軍の車引きである趙四（ヂャオスー）が、彼の機転によって、二人の娘が妾にされるのを阻止するのと共通している。また、自分の信念の信ずる所に従って殺人を犯すという点で、「趙子曰」の中の李景純（リージンチュン）と共通点を持っている。その点で、丁二爺は、前作の趙四と李景純の両方の特徴を兼ねそなえている。

このように、「離婚」は、その登場人物の性格からみると、前三作の登場人物を統合させた、一種の発展形式であるといえる。また、このことからある程度の推測がつくように、ストーリーの展開にも共通点がある。すなわち善人と悪人との間にある種の葛闘があり、それが一人の人間の機知や殺人行為によって、一定の解決を見るという点で、前作の「老張的哲学」・「趙子曰」と共通しており、一種の閉塞状況の中で、それを一人の女性に想いを寄せることによってうち破

ろうとするが、その想いがかなわぬとなると、その状況そのものから逃げだして出奔してしまうという点で、前作の「二馬」と共通している。これらのことから、「離婚」はストーリーの展開においても、前三作を統合したものであり、一種の発展形式であるといえる。

以上、「離婚」と前作とを比較し、その共通点をあげた。しかし同時に、「離婚」には前作と少しちがう所も見られる。それはまた、「離婚」独自の特徴ともなるものであり、老舎の小説作成上の変化を示すものである。以下、その相違点を見ていこう。

四、「離婚」と前三作との相違点

前章で共通点をあげた主な登場人物にも、微妙な相違点が見られる。次に、前章と同じ順にそれを並べることとする。

老李は、いなかから、はなやかな北京に来て、大学生という雲の上の身分となり、財政学と銀行学を勉強して、財政所という役所に職を得た。これは趙子曰と小馬の理想の実現した姿であった。ところが、その職場といえば、同僚たちはくだらない社交にうつつをぬかし、仕事らしい仕事をせず、あやしげなボスに牛耳られており、また、たとえどんなにそれに従順に適応していても、ふりかかる災難からは逃がれられぬという「生き地獄」であった。この点で、「離婚」に描かれた世界は、前作の理想を裏切って、見事に現実的である。趙子曰のように、大学生として国の将来を担うという自覚に目ざめ、小馬の理想のように財政学と銀行学をいくら大学で勉強してみても、現実の職場に入ってみると、国家の改革などということにはほど遠く、何の役にも立たないのである。また、老李はそのような職場や社会に対して絶望感を抱くと同時に、その中でいくら悩んでみてもどうすることもできない自分自身に対しても、結局は自分が軽蔑す

る人間と何ら変わるところが無いどころか、丁二爺ほどの勇気も持ち合わせないと、絶望の気持ちを抱いている。またその一方で、色々な人に対する働きかけを行い、少しでも成果があると、それなりに話が通じるものだと考えなおしたりする。また話の通じない妻に絶望しながらも、隣人や子供たちとのふれあいに、ささやかな幸せを見出したりもする。このように、現実を冷静に見つめ、現実に絶望しながらも、決して自分からも社会からも目をそらさず、自分のできる働きかけを少しずつ実行していき、そこに時に幸せを感じるといった描写は、前作に比べると、より現実的であり、バランスとふくらみを持ったものであるということができる。

悪人である小趙は、前作の老張と欧陽天風を統合した人物である。しかし前作の悪人たちが百パーセントの悪人に徹し、いささかも人間としての悩みや弱みを見せることの無いのに対し、小趙は、自分が利用する目的で誘惑した秀真に、本気で惚れてしまうという弱みを見せる。そしてこのことが、自分自身にとって悪人としての命取りになってしまうことに気づきながら、どうすることもできない自分にとまどう。そして最後には、秀真が待っているからという丁二爺のウソにおびき出されて、自分自身の命を失ってしまうのである。このような人間としてのふくらみは、前作に描かれた悪人にはまったく見られないものである。このような点で、ここにおいても、人物の描写に、より自然で、多面的なものが加わっていることを指摘できる。

丁二爺は、前作の趙四と李景純と同様に、その突出した行為によって一気に物語を収束させるという重要な役割を担う人物である。そのため、この三人については、少し細かく見ていく必要がある。

趙四は、前作「老張的哲学」の中でも非常に特異な人物である。身分の低い車引きでありながら、老張のワナにはまり身動きならない青年達がたよりにし、相談を持ちかける。それに対して、趙四は常に冷静で適格な判断を下し続け、

機転によって、恋人が人の妾にされるという彼らの危機を救う。しかし、彼ら自身がその救われたチャンスを生かしきれず、自滅していく時、やはりその過ちの原因は彼ら自身にあることを冷静に指摘する。この点で、趙四は、老舎が彼をいかにユーモラスに描いていても、どこか突出した超人のような印象がある。そして、老舎は同時に彼が車引きになるまでの経歴に、興味深いエピソードをつけ加えている。それは趙四が、かつてはかなり裕福で、立派な人間であったということである。その彼がなぜ没落したかというと、人に金やものを無差別に恵み続けたからである。この部分は、老舎の恩人でやはりもとは金持ちでありながら、他人に金や物を施し続け、ついには無一文になり、出家してしまった劉大叔（リュウダーシュー）（宗月大師）を連想させる。しかし趙四の突出性はそれだけではない。彼は、かつて彼の金をもらっておきながら、無一文になった自分に背を向けた人間の頭に、レンガを投げつけるという流血事件を起こし、入獄するのである。牢の中で、彼はどうしてこんなことになったのかと考え続け、その結果こんどは金ではなく、何か人の手助けになることをして、「良い人間」になろうとする。そして出獄後、「自分を捨ててひとを救う」ために色々なことを試みる。ところがそれがすべて裏目にでて、逆に助けようとした人から恨まれるという結果になり、ここでも彼のやり方は失敗してしまう。ところが、彼はいよいよ素寒貧になって働かなければ生きていけないとなっても、何とか「自分を捨てて人を救う」職業につこうと、車引きを選ぶのである。しかし彼のそんな気持ちとは裏腹に、車引きになった自分を人はバカにし、前に彼に世話になった人ほど、彼に対してひどいしうちをする。そこで結局、唯一彼を人間あつかいしてくれたキリスト教団体である救世軍に、彼は入り、教会の仕事を手伝うかたわら、軍官付きの車引きになるのである。以上が彼の経歴である。老舎はこのような趙四の描写を諧謔の迷彩服でくるみ、いかにも低い地位にふさわしい人間のように描いているが、その内容は筆致とは裏腹に、趙四の一種の聖人のような突出性—普通の人とは違った独特の超人として

の性格―を浮き彫りにしている。

では「趙子曰」の李景純はどうであろうか？彼も少し他の人とは違った突出した存在として描かれている。例えば、趙子曰をはじめ、他の遊び好きの大学生達の中で、彼は常にあるべき道を説き、孤高である。趙子曰に悪友とは交わらぬよう説教するが、みながその悪友を非難する時、自分自身はそのような人とは交わらないが、特に悪く思っているわけではないと言い、その非難には加わらない。他の大学生達が、笑い、怒り、泣き、ケンカし、といった人間くさい具体的な行動をしている中で、彼一人が超然としている。しかし、困っている人を助けることにはとても熱心である。また、こと中国の社会や政治にかかわることになると、非常に過激な行動を取り、自らの信念にもとづいて軍閥の大物の暗殺をはかることもやってのける。結局、彼のこのような行動が、他の大学生たちを立ちなおらせ、覚醒させるという作用をするのであるが、彼のこのような性格描写自体をみると、やはり一種の超人、聖人のおもむきを持っている。

以上、述べたように、前作の二人の人物―趙四と李景純は、どちらも、他の人物とは違った、突出した性格を持った存在として描かれていることがわかるのである(4)。

では、「離婚」の中でこれらの人物に相当する丁二爺はどうかというと、彼には少しちがった側面がみられる。それは、自分自身が犯す殺人行為についての自覚である。例えば、彼は子供の時からかわいがってきた秀真が極めつきの悪人、小趙の手に落ちるのを防ぐため、小趙を殺すことを決意し、小趙にウソをついておびきだす算段をするが、そのあとで、自分が小趙を殺すことの意味について色々考えをめぐらす。その中で、自分が小趙を殺すのは、ひとつには世話になった張大哥や、かわいい秀真のためではあるが、もうひとつには自分自身のためであることを自覚するところがある。つまり、自分はいままで何に対しても思いきってやってみるということがなかったが、世の中のことはなんでもやってみ

なければどうなるかわからない、やってみれば、やる前には恐れていたことが案外何でもなかったりする、そしてもし自分が若い時にこのことに気づいて、もう少し思いきってやってみるということをしていれば、自分自身このように人からバカにされるような役立たずにはならずにすんだのではないか、自分は英雄でも何でもないけれど、とにかく、この趙四を殺すということで、ひとつやれるものかどうか試してみよう、失敗したら、またそれはその時の話だという点に思い至るのである。このように、自分が人のために何かをするのは、決して人のためだけでなく、自分自身のためでもあるという自覚は、前作の二人（趙四と李景純）の「己を捨てて他を救う」というものとは、まったく性格を異にするものである。

もう一つ注目すべきであるのは、丁二爺が殺人を決行してから陥る罪悪感と恐怖の描写である。すなわち、小趙の殺人は成功し、それが、市長交代による社会的変動にからんだ政治的事件と判断されて、丁二爺については何の嫌疑もかからずに処理される。それにもかかわらず、丁二爺は毎晩、自分が刑場で死刑になる夢を見て、とても外に出られないほどの罪悪感にさいなまれる。どのような名分があろうと、生身の人間一人を殺すことの重たさが、彼を苦しめるのである。このような点も、前作の趙四や李景純には見られない一側面である。

以上、「離婚」の中の主な登場人物を、前作の同じタイプの人物と比較すると、どれも、より現実的に、より客観的に、より人間としてのふくらみを持って、多面的に表現されていることがわかる。これは、「離婚」のもつ小説としての大きな特徴であり、前作と比較した場合の大きな変化である。では、このような特徴や変化は、一体何に起因し、どこからきたものであろうか。以下この問題について考察を加えることとする。

五、「離婚」と「文学概論講義」

前章で述べたように、前作に比べて「離婚」は、その人物描写が、より現実的に、より客観的に、より人間的になっている。私はこの変化は、老舎の中に、この作品を写実主義によって書き上げようという、はっきりした自覚があったためと考える。しかし、ここで問題となるのは、老舎は一体写実主義というものを、どのよう考えていたかということである。これについては、我々はそれを知るための手がかりを、老舎の当時の状況から得ることができる(5)。

老舎は、「離婚」を書き上げる三年前の一九三〇年二月に、シンガポールを経由してイギリスから中国に帰り、その年の七月に済南の斉魯大学に招かれ国学研究所文学主任と文学院の文学教授に就任している。老舎はそこを一九三四年六月二十九日に辞すまでの四年間に、大学の講義をしながら、さまざまな作品を書き上げ、「離婚」もその一つであった。つまり、老舎は文学を講じつつ、文学を書いていたのである。では、老舎は一体、大学でどのような文学の講義をしていたのだろうか？また、このことは老舎の文学観の形成及び文学作品にどのように関係していたのだろうか。

このことを知るための資料として当時老舎が講義していた文学の講義録がある。これは老舎が文学概論の講義を始めた一九三一年から書き始められたもので、後に斉魯大学文学院から印行された。しかしこの本は学生の教材として印刷され、一種の内部発行であったため、一般には公開されず、長く失われたままになっていた。ところが、近年それが発見され、一九八四年に北京出版社から新たに発行された。そのため、我々がこれを目にすることができるものである。以下それにもとづいて、写実主義についての老舎の記述を見ていくこととする。

「文学概論講義」は、第一講の「引言」から、第十五講の「小説」まで、さまざまな形で内外の文学を論じたもので

あるが、そのうちの第十講と第十一講に「文学的傾向」として、さまざまな文学理論をその傾向別に歴史を追って述べた部分があり、その中に写実主義について、次のような叙述が見える。

……我們在他們的作品中看出，人們好像機器，受着命運支配，無論怎様也逃不出那天然律。他們的好人與壞人不是一種代表人物，而是真的人；那就是説，好人也有壞處，壞人也有好處，正如杜思妥亦夫基（Dostoevsky）説：〝大概的説，就是壞人也比我們所設想的直爽而簡單得多。〟（The Brothers Karamazoff）……

「……我々は彼らの作品から以下のことを読みとることができる。人々はまるでロボットのように、運命に支配され、どうしてもその自然の法則から逃れることができない。彼らの（描くところの）善人と悪人は一種の代表人物ではなく、本当の人間である；それはすなわち、善人にも悪いところがあり、悪人にも好いところがあるということであり、このことは正にドストエフスキーが『大体のところ、たとえ（実際の）悪人だって我々が考える（悪人）よりはずっと率直であり、単純である』（カラマーゾフの兄弟）と言うとおりなのである。」

ここで述べられている「善人にも悪いところがあり、悪人にも良いところがある」という部分は、前作の善人や悪人が、一種の「代表人物」であったのに対し、「離婚」に描かれるそれが「本当の人間」に変化しているのに対応するのではないだろうか。つまり、老舎は「離婚」を書くのに、この自分自身の写実主義についての見解をよりどころにして、今までの作品の描写を組み変えていったのではないだろうか。

また、老舎は、写実主義の長所と短所をとりあげて、次のように述べている。

寫實主義的好處是抛開幻想，而直接的看社会。這也是時代精神的鼓動，叫為藝術而藝術改成為生命而藝術。這様，在内容上它比浪漫主義更親切，更接近生命。在文藝上它是更需要天才與深刻観察的，因為它是大胆的揭破黒暗，不求以甜蜜的材料引人入勝，從而它必需有極大的描寫力量才足以使人信服。同時，它的缺点也就在用力過猛，而破壊了調和之美。……

「写実主義の長所は幻想を捨てて直接社会を見ることである。これはまた時代精神の鼓動でもあり、芸術のための芸術を生命のための芸術に改めることである。このように、それは内容的にはロマン主義よりも、もっと身近で、もっと生命に近づいたものである。文学的にはそれはもっと天賦の才能と深い観察を必要とする。なぜなら、それは大胆に暗黒を暴露することであり、甘い材料で人を魅了することは求めないからである。このことからそれにはとてつもない描写力を必要とし、それがあってこそ、人を信服させることができるのである。と同時に、その欠点は、力が入りすぎてその結果、調和の美を破壊することにある。」

この部分は、前作での理想として説かれた、大学できちんとした近代的な学問を勉強して将来の中国を作り上げる有益な人物となるという幻想が、実際にその財政所という社会に入ってみると、そこでは闇にあがくだけで何もすることができない「地獄」であったという「離婚」における老李の描き方の変化に対応している。

一方、この最後の部分には写実主義の欠点も指摘されている。それは「調和の美」を欠くということである。この後、老舎はArnold Bennettのツルゲーネフとドストエフスキーの作品についての評論「Books,Persons」を引用しているが、

そこではドストエフスキーのすべての作品が、この「不完全」であるという大きな欠点を持っていると述べている。それに続けて、老舎は次のように言う。

……是的，寫實派的寫家熱心於社会往往忘了他是個藝術家。古典主義的作品是無處忘了美，浪漫主義的往往因好奇而破壞了美，寫實主義的是常因求實而不顧形式。況且，寫實家要處處真實，因而往往故意的搜求人類的醜悪；……

「……その通りである。写実派の作家は社会に熱心なあまり、自分が芸術家であることを忘れる。古典主義の作品は美を忘れることはないが、ロマン主義の作品は往往にして奇を好むがゆえに美を破壊し、写実主義の作品は真実を求めるがゆえに形式をかえりみない。そのうえ、写実主義作家はすべてに真実を求める。そのため往往にして無理に人類の醜さを狙うことになる……」

老舎はこのように写実主義の欠点、「調和の美を欠き、形式的な均衡をくずす」ということを強く意識していた。そのため、「離婚」においては、「張大哥」という軸になる人物を中に置いて、それを狂言まわしとし、その軸からはずれないようにし、またユーモアについても筆をおさえて、「調和の美」を欠いてしまわないように気を配ったのである。このことは、老舎が後になって書いた「離婚」についての述懐(6)に、以下のような微妙な表現があることからもうかがわれる。

在下筆之前，我已有了整個計劃；寫起来又能一氣到底，没有間斷，我的眼睛始終没離開我的手，當然寫出來的能够整齊一致，不至於大嘟嚕小塊的。匀淨是〈離婚〉的好處，假如没有別的可説的。我立意要它幽默，可是我這回把幽

默看住了，不准它把我帶了走。饒這麼樣，到底還有「滑」下去的地方，幽默這個東西——假如它是個東西——實在不易拿得穩，它似乎知道你不能瞪着眼盯住它，它有機會就跑出去。可是從另一方面説呢，多數的幽默寫家是免不了順流而下以至野調無腔的，那要緊的似乎這個：文藝，特別是幽默的，自要「底氣」堅實，粗野一些倒不算什麼。Dostoevsky的作品——還有許多這樣偉大寫家的作品——是很欠完整的，可是他的偉大處永不被這些缺欠遮蔽。以今日中國文藝的情形來説，我倒希望有些頂硬頂粗莽頂不易消化的作品出来，粗野是一種力量、而精巧往往是種毛病，……有了病的文化才承認這種不自然的現象，而且稱之為美。文藝或者也如此。這麼一想，我對〈離婚〉似乎又不能滿意了，寫得太小巧，笑得帶着点酸味！……

「書く前に、私には全体の計画があり、書き始めてからは一気に書いて、間を置かず、私の目は私の手をじっと見はっていたので、当然書かれたものはきちんとバランスがとれふぞろいにはならなかった。このまとまりがとれているのが、「離婚」の長所である。もしも他にとりたてて言うべきものが無いならの話だが。私はこれをユーモア作品にしようと思ったが、今回はユーモアを見はっていて、私をひきまわすことを許さなかった。それでもやはりなお、筆が「すべって」しまったところがあった。ユーモアというものは——もしもそれがものならばの話だが——本当にしっかり握っているのがむつかしい、それはこちらがしっかりと見はっていないとわかると、スキを見て逃げ出してしまう。しかしまた別の見方からすると、多くのユーモア作家は調子に乗って野放図にならざるを得ない。結局、大切なのは以下のことである。つまり文芸、特にユーモア作品は、その「底」がしっかりとしてさえいれば少々野放図でもかまわないのである。ドストエフスキーの作品——それに多数のこのような偉大な作家の作品——は非

常に不完全なものであるが、彼らの偉大さはこの欠点によってかくされてしまうということがない。今日の中国文学の状況から言うと、私はむしろ骨があって、荒っぽく、容易に消化しないような作品がでてきてほしい。荒荒しさは力ではあるが、精巧さは病気である。……病的な文化であってこそこのような不自然な現象を許容し、それを「美」と称する。文芸も同じかも知れない。こう考えると、私は「離婚」に対して満足できなくなってしまった。描き方が小じんまりしすぎて、笑いにせつなさがまじるのだ……」

老舎はここではユーモアに焦点をしぼってのべているが、ドストエフスキーを引いていることからもわかるように、老舎が写実主義の持つ欠点――不完全さ――に陥らぬよう注意しすぎた結果、あまりにきちんとした作品にしあがってしまい、かえって気に入らなくなってしまったということが、言いたいのではないだろうか。しかし、これはあくまで書き上がった後の感想であり、このことは同時に書いている時の写実主義への傾倒とその欠点を克服するための老舎の気配りを示していると言える。

六、終わりに

老舎夫人である胡絜青女士は「文学概論講義」の序文において、この書の出版の意義に触れ、次のように書いておられる。

老舎自己多次寫到他對文藝理論馬馬虎虎、鑽研不深；可是，由於有了這本書，實際情況似乎並非完全如此。作為一個教授和作家，老舎對文學的作用，文學的特殊規律，文學的風格等等其本問題是有自己的見解的。這部〈文學概論

講義〉就是個證明。它能説明老舍對這些問題下過相當的功夫，動過不少腦筋，有過自己獨特的主張。它的出版、對瞭解和研究老舍早中期的文藝思想是有幫助的，對解剖、理解和評價老舍本人的作品也是有用的。

「老舍は彼自身、何度も自分は文芸理論については、いいかげんで、不勉強だと書いている。しかし、この本がでてきてみると、実際はまったくそうというわけでもなかったようである。一人の教授および作家として、老舍は文学の役割、文学の特殊な規律、文学の風格などの基本的な問題について、自分自身の見解をきちんと持っていた。この『文学概論講義』がその証である。それは老舍がこれらの問題について、相当の時間をさき、熟考を重ね、自分自身の独自の主張を持っていたことを証明することができる。それを出版することは、老舍の早期・中期の文芸思想の解明と研究に対して、非常に有益であり、また老舍の作品を解剖し、理解し、評論するのに、非常に役立つものである。」

筆者は老舍の前作と「離婚」の間に見られる変化の原因が、老舍自身の文芸思想の形成と深いかかわりがあるものと考え、この変化の原因が老舍の写実主義への傾斜にあることを論証した。それはもちろん「離婚」を書いた時点でのことであり、これをすべての作品にあてはめるつもりはない。しかしながらこの時点において、老舍が作品を書くにあたって、はっきりともとづこうとする文芸理論があったこと、つまり老舍はこの時期から一つ一つの作品について、ある一つの文学観にもとづいて作品を書き上げることを始めた(7)ということを指摘することは、ある程度の意義を持つものと考える。なぜなら、老舍という人は自分や作品について実に多くの言を残していながら、肝腎なところになると黙して語らないか、少し斜めにかまえた言い方をし、はなはだしい場合には、老舍夫人も指摘するように、まったく正反対の

ことを何度も強調したりするからである。

注

（1）「老舎の文学とキリスト教（一）――『老張的哲学』――」上智大学外国語学部紀要十八号、一九八四；「老舎の文学とキリスト教（二）――『趙子曰』と『二馬』――」同紀要十九号、一九八五。

（2）キリスト教（プロテスタント）の浸礼会（American Baptist Foreign Mission Society）が一九〇三年済南（山東省）に開設した大学で欧名はShantung Christian University 現在は山東医学院となっている。

（3）この初版本をふくめ、「離婚」には四種のテキストがある。筆者は晨光文学叢書本と人民出版社本を参照した。

（4）筆者は前掲の二論文の中で、この二人について、老舎とキリスト教のかかわりの痕跡を示すものであることを指摘した。丁二爺についても、殺人の成功をうちあけられた老李が、その瞬間、丁二爺の汚れた服が真白に光かがやいて見えたという箇所などにその痕跡が見られる。しかしながら、前二作に比べるとその痕跡はずっと薄いものであり、筆者はこのことを老舎自身の文学観の形成と関係するものと考えている。つまり「老張的哲学」と「趙子曰」の二作においては、老舎のキリスト教とのかかわりが直接影響しているが、「二馬」では、それを客体化して描くことによってそこから解放され、「離婚」では、完全に自らの文学理論による作品形成がなされているということである。

（5）以下に引く老舎の経歴はすべて曽広燦氏の「老舎年譜」（「老舎研究資料」、北京十月出版社、一九八五）に拠る。

（6）「我怎様寫〈離婚〉」（原載〈宇宙風〉一九三五年二月十六日第七期）

（7）だからこそ老舎はこの頃から大量に文学作品を書き始めることができたし、一九三四年には著作に専念するために斉魯大学を辞職したのではないだろうか。